

砲火と山鳩

宮柊二

宮柁一著

砲火と山鳩

— 宮柁一・愛の手紙 —

河出書房新社

砲火と山鳩——宮柊二・愛の手紙

©1988

昭和六十三年七月二十五日 初版印刷

昭和六十三年七月三十日 初版発行

定価は函・帯に表示してあります

著者 宮柊二

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話東京四〇四―四一八六―一（営業）

振替東京〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 小泉製本

Printed in Japan

ISBN4-309-00514-4

目次

第1章	出会いから出征まで（昭和14年）	五
第2章 a	戦中書簡（昭和15年）	四一
第2章 b	戦中書簡（昭和16年）	五三
第2章 c	戦中書簡（昭和17年）	一〇一
第2章 d	戦中書簡（昭和18年）	一五三
第3章	帰還から結婚まで（昭和18年、19年）	一七三
第4章	旅中書信ほか（昭和19年）	二二七
第5章	再応召、終戦、疎開先へ（昭和20年）	二三五
補注	中山礼治	二五九
あとがき	宮英子	二六三

砲火と山鳩

——宮柊二・愛の手紙

第1章

出会いから出征まで
(昭和14年)

昭和14年2月21日／世田谷区北沢三の一、〇一六すみれ館 宮柊二より／淀橋区戸塚町一の三九二

滝口英子あて（封書）

御^註知^註らせを頂き厚く御礼申し上げます。

石川先生の御様子を承り何かしら嬉しい気で居ります。私の郷里を小千谷と石川先生は仰言つていらつしやいます。信濃川が魚野川といふ川と合しますところを川口村と言ひ、その信濃川に沿うて下り、川口村に隣る町が小千谷、魚野川を遡つて川口村に隣る町が堀之内、その堀之内が私の郷里で御座います。越後平野は小千谷から北に向つて広く展け、川口、堀之内は反対にそれらの川に沿うて遡り、山間に入るその足溜りとなる村落とでも申しませうか。皆上越線の沿線であります。

石川先生には機会を得ました節にいろいろ御礼やら御挨拶やら申上げ度く存じて居りますが、何卒よろしく御伝へ下さいまし。御目にかかりました頃の御様子、御音声いまでもはつきりと思ひうかべられます。私が中学を出まして一二年の後、まだ少年でして、一身上についてもいろいろと御忠告などを頂きました。

御手紙の中に宮先生とありますが、それだけは御ゆるし下さい。そんな風に呼ばれますこと自体とても嫌ひなのです。

滝口さんのお歌、多磨で毎月注意して拝見して居ります。二月号のお作品はすこし表面的に流れ過ぎて居りますやうに思はれました。御手紙の中にもありました様に、お勉強のうへにいろいろ疑問などが多く出ますことと存じますが、さうしたものに答へて下さる人があるとういと思ひます。何故なれば滝口さんの御歌を拝見して居りますと非常にナイーブない個性を持つて居られ、感心して居りますと、その次の月はそのよかつたと思はれた点が、あとかたも無くなつてゐるといふ様な場合がしばしばあります。これは滝口さんが未だ御自分の個性やら性格やらを客觀的に見て自ら伸ばしておゆきになる力に欠けてゐるか（失礼ですが）思はれるからです。滝口さんの性格を含め歌は、いくら歌が端麗に出来てゐても致方なく、又いくら性格（個性）がいいものであつても、それを技巧の上に生かしてゆかねば（歌は型の芸術でもありませうから）致方ないと思ひます。ですから若し誰方が滝口さんの個性を見て伸ばして下さる方があつたと滝口さんに幸と思ひます。滝口さんに希望の方があれば、御紹介申上げませう。御遠慮なく御言ひつけ下さいまし。

女高師では歌が盛んですか。どうか御友達を沢山多磨に入れて下さいまし。多磨だけが決してむづかしいではありませんから。

滝口さんの御宅はどの辺でいらつしやいますか。私も五六年前、戸塚の一丁目に下宿して、あるところに勤めて居つたことがありますので戸塚はなつかしく存じます。

先づは右御礼まで。

今朝より雪が降り出しましたが淡雪とでも申しませうか。もう溶けて、す黒い冬木の木肌をつたうて居ります。 二月二十一日 敬具

註1・昭和14年2月19日、東京日比谷の松本楼における「多磨」歌会終了後、柊二は滝口英子に声をかけて、東京女高師の石川謙博士の在否をたずねた返信。出逢いのはじまりである。

註2・石川謙博士は、英子の在学する東京女子高等師範学校で教育史を講じた。昭和14年、石門心学で学士院恩賜賞を受賞。同25年、学士院賞を受賞。昭和6年ごろ、門弟数名を連れ、新潟県堀之内町の柊二生家丸末書店に数日滞在した。

註3・富山から上京した英子一家は、昭和7年から同12年まで東京市淀橋区戸塚町一丁目四九二番地、近衛騎兵聯隊横に住み、その後冒記の住所に移った。柊二が同じく近衛騎兵聯隊ちかくに住み、昭和8年5月から戸塚の東学社につとめたことが、柊二の「青春日記」に記されている。

昭和14年3月8日夜／同前（封書）

拝呈 御手紙ありがたく拝見しました。度々恐縮ですが御言葉に甘へて石川先生の御住所御聞かせ願ひ度う存じます。

戸塚の私の下宿して居りましたところは早稲田野球部合宿所の近くで近衛聯隊（騎兵）に向つてゐた家でした。

朝夕の喇叭と夏の夕がたのひぐらしの声、いまでも耳に残つて居ります。^{（註1）}王子電車にて通つた頃もあり、なつかしく思ひます。又、只今は早稲田に在学して居ります^{（註2）}弟と従弟がやはり一丁目

に下宿して居ります。追憶とは美しいものばかりを言ふのでせうか何かしらさうした感持^{かんぢ}です。

御作品に対して失礼なことを申し上げて了つたと、実は後で悔いて居りました。御ゆるし願ひ上げます。出し度くない月は休むといふことは矢張り不可^{ひつ}ないのではないでせうか。殊に初心の人達は。私の近い友達もそんな風に申しますけれど、無理に投稿させて居ります。そして勿論投稿する作品は全力を尽したものを（数は少くとも）、出し度いと思ひます。

御手紙の中にあります件、私はまだ人の歌を見る力はありません。おゆるし下さい。それに歌会の帰りは白秋先生の御供をせねばなりませんので時間が御座いませんが、よろしかつたら、時に御話をお聞かせにお出下さい。只今僅かばかり親しいもののみが歌をもつては話を聞かせに来てくれますが、そんな時でも御遊びに御出下さいまし。

三月号の御作品、今朝拝見しました。いい御歌です。ただもうすこし右なら右、左なら左といふ風になつたらと思はれるふしがありました。詳しい事はさし控へ度いと思ひますが、大山^{註³}の回教堂など御覧にいらつしたら、どうぞ御寄り下さいまし。昼間は部屋に居ります。御待ちして居りませう。

昨日はぬくとい雨がうれしくて一日部屋の窓をあけて居りました。雨の中で鶯が啼いて居りました。道一つへだてた前の家の庭に白い梅が咲き出したので、そこに來てゐるのかも知れません。

取急ぎ御礼と御願ひまで申上げます。字がきたなく御読みづらいことと存じますが御ゆるし下さい。

註1・早稲田から三の輪までの市電を王子電車と呼んだ。現在残っている唯一の路上都電。王子には格二の本家宮友一が住む。

註2・関恭三。次弟で関家の養子。従弟は父の弟の宮芳平（46ページ註2参照）の長男、宮農。

註3・小田急沿線に見える回教寺院。英子は見学を希望していた。

昭和14年4月11日／同前（葉書）

暖かくなりました。御健祥のことと拝察申上げます。去月はいろいろと有難う存じました。厚く御礼申述べます。

さて実は大変御迷惑な御願ひを申上げ度いのですが、姉が^{（註1）}この度上京し、勤めの関係上、王電^{（註2）}を利用することになって居ります。弟も高田馬場に居りますことですので、小生と姉と高田馬場に引越し度いと思ひます。で、御近所に貸間かあばいともありましたら、御ついでの時御知らせ願はれませんか。（六畳位）いづれ歌会の節にでも万々。

註1・宮カウ。新潟県の浦佐小学校から東京へ転勤。

註2・王子電車のこと。

昭和14年4月18日（封筒の日付に8日とあるのは書き誤りか）／同前（封書）

拝呈 歌会当日は失礼致しました。石川先生の件やら、御願ひしました部屋の件やら、沢山に御礼も

御託も申上げ度く存じて居りましたが、仲々にその時間とてなく申訳のないことを致しました。御ゆるし願ひ上げます。

さてその夜、部屋に帰つてみますと、姉から手紙が届いて居りまして、ここ当分は只今ゐる親戚の家から勤先に通ひ度い由の意志でありました。

それで御迷惑までかけて御願ひしたことでありましたが、高田馬場引越を中止しまして、私も当分ここに居り度いと存じます。で御願ひしました貸部屋をおさがし頂きますこと、御放念下さいますやう願ひ上げます。

いづれ又御目にかかりました節に万々御礼申上げ度く存じます。略儀御ゆるし下さいまし。

四月十八日

敬具

石川先生の御住所お知らせ頂きながら、いまだ御挨拶の書面も差上げないで居ります。目まぐるしいやうにこここのところ境遇が変化しつとありますので、心持ちも(註1)判断を失ひ度くないと思ひながら何かしら押し流されてゐますやうにせはしなく居りますので、いづれ只今の状態が落着きましたら改めて御無音の御託びも申上げ度く存じて居ります。

註1・カッコ内、抹消。

昭和14年4月19日／同前（葉書）

御高配ありがたく存じます。高田馬場引越は姉と共々でなく私だけでもいいのですが、私はどうも腰が重い方で、余程理由がないと立ち上げません。

土曜日およろしかつたら御出で下さいまし。きたない処で、又乱雑にして居ります部屋ですが。

(回々教の寺などもう御覧になりましたか。)^(註1) その節御書翰の中にありましたやうに地図^(註1)なぞ御見せ

頂けますと有難く存じます。私は只今、夜昼とも殆ど部屋にをりますし仕事^(註2)とてもありませんので、御出でおまちしてをります。

御歌は是非御出しなさいませ。休まずに。若し私でよかつたら六十首の中からえらばせて頂きませうか。

註1・英子の関西旅行に関する地図。

註2・昭和14年3月、白秋秘書を辞した格二は図書館司書などの受験勉強に打込んでいた。

昭和14年4月24日／同前（封書）

○只今は御丁寧な御手紙をいただき厚くお礼申し上げます。私からお宅に伺ひますのが礼でありますのに、わざわざ遠いところを御出で願つたりして御ゆるし下さいまし。

○苦勞したもののより素直に楽に出来たものがほめられるといふ言葉、矢幡^(註1)さんを始め皆が申します。

そしてそれが歌の性格であるやうに思ひこまれますが、そしてそれは大切のことですが、御承知のやうに歌は形の決つた短い詩でありますから、正直申しますと助詞の一字、それだけの工夫で一首が生

きたり死んだり、或ひは新しい世界の創造となつたりします。ですから、歌における身をけづる苦心といふものは、なまじ形がきまつてゐるだけに辛いものではありませんまいか。これまでの先人のつくり上げた内容、技巧の世界の上に身をおくことは易いことであります。

○御原稿を拝見して失礼申上げましたが、もう一つ申上げさせて頂くならば、伊豆の方の歌は後にして、もう一步御苦労して頂いた方がよかつたと思ひました。素材がいいだけに、あの程度で筆をおさめてしまはれることは惜しいと思はれました。そして伊豆の方は苦心してゆけばゆく程、立派なものが出来てくる作品でした。横浜とかその他は一応あれで内容と技巧が一劃^{くわ}りのところにあるので、あれはあれで立派ですが、手を入れるとしてもほんの瑣末な点だけにとどまるのでして、若しその上を望むとすれば、あの材料に対するあなたの別の解釈が必要になつてきます。

○時間のことは私は決して差支へはありませんでしたのですから、御懸念下さいませぬやうに。却てもうすこし御話など伺へたらと思ひましたのですけれど、男同志の友達と違つて、御引止めをしてはと遠慮申上げました。どうぞこの後もおこころむきましたら御遊びにいらつしつて下さい。御待ち申上げてをります。

○昨日は、久しぶりで白秋先生のところに伺ひ、いろいろ御話伺つたり申上げたりして来ました。

すこし体の具合わるく、床の上で筆をとりました。御読みづらいこととおもひますが御許し願ひます。

艸々

大変いい天気です。散歩に出たい気がします。

四月二十四日